

朗読台本「10の扉」

作：唐下 浩

男Aと女Aが、月あかりひとつない真っ暗な部屋に閉じこめられた。
二人とも記憶を失っていて、自分が誰かも、ここがどこかも分からなかった。
「誰か…誰かいませんか!？」
男Aが壁をたたいて叫んでも、返事はない。
暗闇のなか立ちつくす男Aの顔が、みるみる青ざめていく。
すると、すぐそばにいたのであろう女Aの呼吸が、かすかに聞こえてきた。
女Aはうずくまったまま、恐怖で肩をふるわせている。
「何だよ、この気味の悪い部屋は。それに、目の前にいる女は何者だ。
俺の知り合いなのか…。くそっ、何も思いだせない。俺は一体…誰なんだ？」
いらだちを隠せない男Aは、女Aにつめよった。
「お前もここから、脱出する方法を考えろよ！」
顔をあげる女Aの目に、うっすらと涙がうかぼうとした、その時！
ひとつの光と、光がてらした先の壁に、
【10の扉が開くまでは、決して泣いてはいけない】
という文字がうかびあがった。
「『10の扉が開くまでは、決して泣いてはいけない』…何のことだ？」
「あれ…」
女Aが男Aの後ろを指さした。
そこには数字の『1』と刻まれた扉があった。
男Aは不安にかられ、ごくりと生唾を飲みこんだ。
これは何かの罠かもしれないし、
とんでもない陰謀に巻きこまれたのかもしれない。
それでも、こんな所で、知らない奴と二人で、野たれ死になんてごめんだ！
「(深呼吸) 行くぞ…」
「うん…」
男Aと女Aは意を決して『1』の扉を開き、足を踏み入れた。
だが二人は、まだ知らなかった。
この扉の先々に待ちかまえている、試練の数々を…。

扉の先も、暗闇だった。

不安と緊張で落ちつかない男Aは、後ろを歩く女Aに何度も声をかけてみるが、女Aは男A以上に恐怖心をいだき、声もでない様子だ。

「可愛げのない女だけど、男の俺がコイツを守らないとな」

男Aは使命感にかられ背筋をのばした。

その時、後ろを歩く女Aの悲鳴が響きわたった。

女Aの足元に、ブラックホールのような大きな穴が開いたのだ。

とっさに床にしがみついた女Aだが、下半身は穴の中だ。

「なんだよ、この部屋は！？」

男Aは両膝を床につけ、女Aに手をのばした。

「つかまれ！！」

男Aが女Aの体を床に引きあげ、事なきを得たが、男Aは動揺をかくせない。

これは素人参加型のドッキリ番組か。

アミューズメントパークの脱出ゲームか。

いや、それにしても手がこみすぎている。しかも命がけだ。まさか悪趣味な金もちが集まって、俺たちの生死を賭けたギャンブルをしてるとか？

だとしたら…。

男Aは暗闇に隠されたカメラを探した。

「おい、どこかで見てるんだろう！？　こんなことして、タダで済むとは思うなよ！　お前ら全員警察につきだしてやるからな！」

男Aが力のかぎりわめいても、部屋の中は静まりかえっていた。男Aは拳を握りしめる。これがゲームっていうなら、必ず生きてここから出てやるからな。

決意を固めた男Aの服のそでを、女Aがひっぱり、

それから見えない天井を指さした。

「ゴゴゴゴゴゴ…」という轟音が上から聞こえ、ドスンッ！と、自分の背丈よりも大きくて丸い岩が落ちてきた。男Aと女Aは、間一髪でそれをよけるが、なんと岩は、二人を目がけて転がってきたのだ。

「走れ！」

男Aと女Aは、走った！

「出口はどこだ！？」

女Aが前方を指さした。

数字の『2』と刻まれた扉を見つけたのだ。

男Aが『2』の扉を開き、二人は次なる部屋に逃げ込み、バタンッ！と、扉を閉めた。

「ふう…これでひと安心だ」

男Aが安堵の顔を見せたのもつかの間、岩は扉をぶち破り、

男Aと女Aを目がけて転がってきたのだ

「こんなのルール違反じゃないのかよ！？」

男Aと女Aは、無我夢中で走った！

だが二人に、さらなる試練が襲いかかる。

岩だけでなく、壁から弓矢が飛んできたり、床下から針が突きだしたり。

男Aは目を白黒させて叫んだ。

「不思議なダンジョンかよ、ここは！？」

男Aと女Aは様々なトラップを回避しつつ、先へ進んだ。

ようやく静かな所にたどり着き、『3』の扉を見つけたところで、

女Aが重たい口を開いた。

「私たち、生きてここから出られますよね…？」

全身汗だくの男Aは、不安を隠して気丈にふるまうしかなかった。

「当たり前だ！ 必ず、必ず生きて帰るぞ」

男Aと女Aは、『3』の扉を開いた。

その後も次々と扉を開いていった。だが…。

『3』の扉を開くと、暴風雨が男Aと女Aを襲った。

2人は何度も飛ばされそうになった。

『4』の扉を開くと、部屋の中にプールがあった。

水中にもぐって次の扉を目指した。

『5』の扉を開くと、耳障りな機械音が響いていた。

男Aと女Aは、たまらず耳を両手でおさえた。

「何だよ、このわずらわしい騒音は！？」

男Aの目から焦点が消え、無意味な呟きをくりかえす…。

なんだよ、なんだよここ、、おれは、誰なんだよ、、

男Aの精神は崩壊寸前だ。そんな男Aの肩に、心配した女Aが優しく手をのばすと、ハッと、男Aは何かに気づいた。

「レン…」

「レン…？」

女Aが不思議そうに首をかしげた。

「思い出したんだよ。俺の名前は、レンだ！」

「私の名前は…ヒマリ…」

男Aと女Aの目に、希望の光がともった。

どこからともなく、軽快なクラシックが聞こえてきた。

男Aと女Aはピアノのメロディに合わせてステップを踏んだ。

暗闇に閉じこめられてからの初めての、高揚感だった。

男Aは（レン）と名のり、女Aは（ヒマリ）と名のった。

だけど、それ以外のことは、どうしても思い出せなかった。

チクタクチクタクと、どこからか時計の針が刻む音が聞こえ、

それから、見知らぬ男女の話し声が聞こえてきた。

「誰かいるのか…？」

レンとヒマリは、声がする方へと進んだ…。

『6』の扉を開くと、まばゆい光がレンとヒマリを襲った。

『7』の扉を開くと、テーブルの上に山積みのリンゴがあった。レンとヒマリのお腹が鳴り、口からヨダレがたれた。2人は我慢できずにリンゴに噛りつく。

何個もリンゴを食べたとき、突然、ヒマリが顔を真っ青にして倒れた。

リンゴの中に、毒リンゴがまじっていたのだ。

レンはヒマリの口に、手をつっこんだ。

「死ぬな！ 生きてここから出るんだろう！？」

レンはヒマリを助けるために必死だ。いつの間にか、レンはヒマリのことを好きになっていたのだ。けれどそれは恋愛感情ではない。ましてや、男女の友情というわけでもなく。もっと違う、何か特別な思いだ。

ヒマリは息をふきかえし、その場で嘔吐した。

「大丈夫か？」

「ありがとう…」

ヒマリは弱々しい笑みをうかべた。ヒマリが助かったことが、レンは泣きたくなるぐらい嬉しかった。しかし泣くわけにはいかない。
なぜなら【10の扉を開くまでは、決して泣いてはいけない】という文字が、レンの脳裏をよぎったからだ。レンには予感があった。
泣いてしまうと、一生この暗闇に閉じこめられてしまうと…。
レンは残りのリンゴをすべて蹴とばして、壁にぶつけた。

『8』の扉を開くと、なにもない殺風景な部屋だが、レンとヒマリをめがけて四方八方から壁がせまってきた。

『9』の扉を開くと、真っ暗なトンネルがどこまでも続いていた。がしかし、どれだけ歩いても、歩いても、『10』の扉にたどり着かない…。
ヒマリの足がもつれ、転んでしまう。

「おい、大丈夫か？」

「もう私…歩けません…」

「次が最後の扉だ。もう少しがんばろう」

「本当に…最後だと思いますか？」

「それは…」

「どうして私たちが、こんな目にあわなきゃいけないの」

「生きるために決まってるだろう」

「意味が分かんないよ。そもそも私たちは、今、生きてるの？」

「どう見ても生きているだろう！ 俺も、ヒマリも」

ヒマリは首を大きくふり、目に大粒の涙をうかべた。

「泣くな！ 『10』の扉を開けるまでは、ぜったいに泣くな！」

ビクッと、ヒマリは肩をふるわせた。

それから歯を食いしばって、なんとか涙をこらえた。

レンはヒマリの手を、やさしく握りしめる。

「一緒に生きよう」

レンが満面の笑みをうかべ、ヒマリが力強くうなずいた、その時。

二人の目の前に、『10』と刻まれた扉が現れた。

そして二人は手をつないだまま、『10』の扉を開いた…。

赤ちゃんの産声が、廊下に響きわたった。

目を輝かせた一人の中年男が、二重につけたマスクを口から外して、椅子から立ちあがった。

二人の赤ん坊を抱えた看護師が「元気な双子です」と、一人の女に声をかけた。双子の赤ん坊は、なかよく手をつないでいた。

女は幸せそうな笑みをうかべ、「レン…ヒマリ…」と、声をかけた。

男A（蓮）と女A（陽葵）は、一人の男（父）と一人の女（母）によって胎内にさずかった命だった。

妊娠して子供が生まれるまで『10月10日』。

扉に書かれた数字は『妊娠〇ヶ月』かを、示していたのだ。

生きたい、生まれたいと思った二つの命が、懸命に『10の扉』を開いたのだった。

〈了〉